

# 玄宗皇帝の図書館行政史話

——帝室図書館長の阿倍仲麻呂と、  
日中の文士人・政客との清交に及ぶ——

(後篇)

児玉孝乃・松見弘道

## IV 仲麻呂をめぐるドラマと、人間模様

### 1. はじめに

本稿の前篇では、標題に掲げたごとく、百花繚乱たる、半世紀あまりに及ぶ「開元の治」を醸し出した玄宗皇帝の治世は、それこそ中期までは、名相を擁して内治に精励恪勤した。戸口は充実して、国庫も豊かとなり、自ら音楽や書、詩にも通じて、李白、王維、顔真卿ら、文人や芸術家らの活動を保護して、世界最大の都市に仕上げた長安を舞台に、豪華、絢爛にして、華麗な貴族文化の極盛期をもたらしむねに説き及んだ。

もとより晩年は、李林甫<sup>1)</sup>や楊国忠<sup>2)</sup>を頼りにし過ぎる一方では、楊貴妃を溺愛するあまり、政治面への情熱を失墜してしまっ、果ては安祿山<sup>3)</sup>の乱を招くことになった。こうした後年における凋落の宿命ぶりについては後述することにして、まずは、名にし負う主役の玄宗皇帝が、当時としては、実に世界に冠たる図書館行政を執ってきた様子を管見することが主眼であった。

そこでその前半では、唐朝を創立した高祖・李淵から、玄宗が即位するまでの約一世紀にわたる間、各代の皇帝は、外征に、内戦にと戦闘に明け暮れしながら、片や内政面では、賢相、名臣を督励して経籍の採訪、収集、校讎<sup>4)</sup>、整備等、図書館の設置、運営にも、見上げた業

績を残している局面を眺めてきた。

ついては、それぞれの時代の各皇帝が、図書館政策を推進するに当たって、その立役者となってきたのは、強いていえば、後漢の桓帝の延熹2年(159)以来、明の太祖の洪武3年(1370)まで、延延1,212年にわたって置かれた秘書省に陣取る秘書監であり、少監たちであったことを強調した。そこでその起源、意義、組織、役割等について、千年以前に及ぶ史書の中に点在する断章的記載を、暗中模索しながら開陳を試みた。

続いて玄宗時代におけるばあいも同様に、勅命を受けた秘書監たち、すなわち主として馬懷素、褚无量、元行沖、徐堅といった館長クラスから始めて、母嬰、韋述、王湾、賀知章、余欽、孟暁ら、諸学者や校書官が、実にめざましく活躍した経緯を、逸事や挿話をも交えながら掘り起こすことに努めた。

よってこの後篇では、前篇を受けて、サブタイトルに掲げた阿倍仲麻呂が、遣唐使として中国へ渡り、後世、異国の土となるまでに演じてき



阿倍仲麻呂  
(百人一首)

たドラマティックな生涯を回想するに当たって、彼を中心に、取り巻く人間模様を描写したいというのが、本篇の意図するところであるむねを理解願いたい。

## 2. 仲麻呂の渡唐と同期生

本稿を貫く根本精神は、二千有余年にわたる日中修交の歴史上において、背景はともあれ、玄宗皇帝の図書館行政を主軸にした史話を演ずることにある。そこに登場する最たるヒーローは、仲麻呂であるが、さらにいえば、彼をめぐる歴史上に残る人物とのかかわりあいにもでちいたらんとするのが主旨である。

それゆえ何といってもまっ先に取り上げねばならないのは、両国友好史のうえで、その金字塔として伝えられる遣唐使についてである。仲麻呂も、留学生として選ばれたその一人であった。つらつら回顧してみると彼の数奇な運命は、そこから始まっている。

ところでもともと遣唐使は、唐朝に対する公的な外交使節であり、唐朝サイドからは、朝貢使といえる。

しかしながらその主たる目的は、政治的な善隣友好、ないしは外交的な駆け引きにあったのではない。それこそ目算としたのは、世界に冠たる花の都としての国際都市、長安を舞台に繰り広げられている先進の学問、文化、芸術はもちろん、国家体制を始めとして、文物制度万般にわたって、がむしゃらに吸収しようとする思惑があったことは、否めないであろう。

なにしろときの長安は、隋朝が築いた大興城を基盤に発展した、夢の都であった。早くから開けたインド、ペルシャ、アラビアに接するアジアの盟主としての帝都で、西アジアのバグダードとならんで、世界的文化圏の中心都市を誇っていた。

さらにいえば学匠、文人、芸術家が輩出した文化一般はいわずもがな、長安城にみられる都市計画、ないしは雄大にして、しかも綿密周到的設計は、先進の域を抜きんでいた。

すなわち中央の北部には大極宮と皇城を配置し、東の春明門を入ると、すぐ右手に皇帝の政

務所がある興慶宮を、さらに官庁街やマーケット街の東市と西市を整然と区画している。

ちなみにまた東市の繁華街に隣接して、遊里の一区画として知られる公認の平康坊<sup>5)</sup>、つまり夜なよな、内外のいかめしい紳士をも悩殺するような、なまめかしいイランむすめの嬌声が聞かれる胡人(中央アジア・インドなど西方諸国からの人による)酒場や、妓院(妓楼・遊女屋)が軒を並べていた。殷賑の極地ともいえる、地上の楽園であった。

それもそのはず、すっかり長安城をまねようとした平城京であるが、とても及びもつかない相談であるといえよう。

こうした国際間事情にあるから、わが国としては、いかなる身命をも擲って、遮二無二、先進の文物を摂取したいというのが、本音であったことを、まず特筆しなければならない。

そのうえ大書したいのは、ときに朝鮮、満州は無論のこと、イラン、ペルシャ、インド、チベットなど各国から、使者をはじめ、学者、政治家、留学生、商人ないしは芸人にいたるまで、あらゆる人種、さまざまな階層が、花の都・長安に雲集していた。かかる成り行きのなか、わが国の国際的地位を高揚することも、第2義的な任務として付与されていた経緯をも忘れてはならない。

顧みるに、これらの遣唐使が、わが国における奈良朝文化の興隆に、いかばかり指導的役割を果たし、引いては日本の古代国家の発展に寄与したいきさつについては、多言を差し挟むまでもない。

またひとたび目を転ずるとき、唐側から答礼使節として来朝し、ときに帰朝する使節と同船してきて、わが朝廷に信書を呈し、文物百般を贈ったり、また唐使の役目を果たすと、そのまま帰化して、日本国家に重用された唐人も多い。

留学生としては吉備真備、阿倍仲麻呂、藤原清河、橘逸勢、多治比広成が、留学僧としては玄昉、最澄、空海、円仁、道慈、栄叡、普照や、語学の天才でもあった靈仙らが傑出していた。

ここで注目される課題は、今日まで名をとど

ろかせている使節のうち、留学生よりは、留学僧の人数の方が、はるかに多いことである。その原因は、当時から仏教の吸収に対する比重の方が、いかに大であったかによる、と一般にみられている。

ところが筆者らがここで考えることは、留学生の場合は、事情を伝える歴史的資料が、天災や戦禍のための書厄<sup>6)</sup>によって、散逸が甚だしかったからによる、ということに尽きる。

これに対して留学僧は寺院に所属していて、とりわけ山岳仏教寺院にあっては、消息を伝える史料が、山中深い経蔵や書庫に保管されているため、書厄を被る災害度が、はるかに少ないので、延々としてより多く伝承されてきたと見てとられる。

さらに中国伝来の仏像、経典、文物類が、無傷に近い状態で今日まで伝わっているのは、山に囲まれた寺院が、信仰のうえからも丁寧に管理してきたからにはほかならないと、いえるのではなかろうか。

さてこの後篇の冒頭では、その代表的人物として、まず第一に、企図する阿倍仲麻呂<sup>ひれき</sup>を挙げ、かれをとりまく仲間との交友物語を披瀝したいと思う。

8世紀の716年のこと、狭い飛鳥地方から、平城京へ遷都して6年め、古事記が編集されて5年めに当たる。元正天皇の靈龜2年、仲麻呂は、数えて19歳の年に、遣唐使に挙げられた。多治比真人<sup>たじひまひとあかたのかみ</sup> 県守<sup>お</sup> (任命されながら、渡唐せず) を押使とした第8次遣唐使で、出発は翌年3月下旬であった。

一行557人<sup>7)</sup>が4隻に分乗して、大船団が組まれた。同行した留学生のなかには、5歳年長の吉備真備<sup>きびのまきび</sup>や大和長岡<sup>やまとながおか</sup>らが、留学僧としては玄昉<sup>げんぼう</sup>らがいた。

仲麻呂の父である船守<sup>なかつかさ たゆう</sup>は、中務大輔(正5位相当)で、まずは中流貴族の間柄に位して、彼は読書好きの秀才であった。

一方の真備の家は、右衛士少尉で、彼より低い身分であったにも拘わらず、留学生に選ばれたのは、自身の実力にはかならない。

南島路航路をとって出航したが、途中で遭難

もなく、東支那海を横断し、四つの船<sup>8)</sup>はそろって13日めの昼前、揚子江口<sup>とうびよう</sup>へ投錨<sup>そうこう</sup>することができた。ここから遡行して運河へ入り、さらに陸路で鄭州・洛陽<sup>かんこくかん</sup>・函谷関を経て、あこがれの、夢にまで見た長安へたどり着いたのは、10月1日<sup>9)</sup>のことである。ときまさに玄宗の開元5年。あたかも「開元の治<sup>かいげん</sup>」の絶頂期であって、若き仲麻呂らにとっては、その感動ぶりはいうに及ばず、見るもの聞くもの驚くばかりで、それこそ、不安と期待に満ちあふれて、胸をとどろかせていたことであろう。

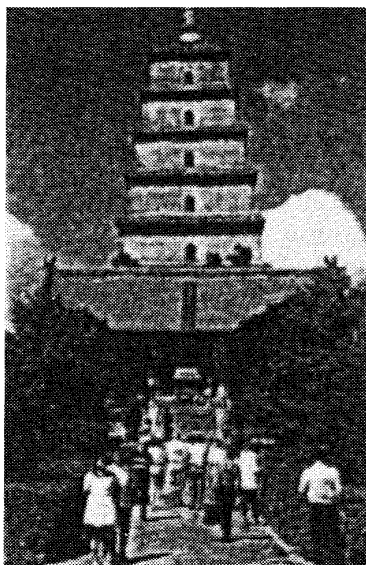
こうして翌718年、無事に使命を果たした一行は、交歓や視察を済ませると、長安を辞去するのであったが、往路同船であった若き留学生の仲麻呂と真備は、あとに残って研修することになった。でも5つ違いの兄弟同様の仲間ではあったが、何かにつけて競合しなければならない成り行きが待ちかまえていた。

当時長安には、現在の大学に相当する高等教育機関として「国子学」「太学<sup>たいがく</sup>」「四門学<sup>10)</sup>」が設けられていた。

3校の入学資格には、家門の相違によって決定されるのが原則であった。仲麻呂は学習院「太学」に入学することができたが、真備は、心ならずも「四門学」の助教である趙玄黙<sup>ちようげんもく</sup><sup>11)</sup>から個人教授を受けることになった。同期の学生でありながら、スタートから差別されては、真備自身としてはおそらく不満<sup>せつしやくわん</sup>で、切齒扼腕して、悔しがったことであろう。

ところで太学の主要なカリキュラムは九經<sup>12)</sup>であったが、仲麻呂は見事に終了し、ここに科挙の試験(官吏登用試験)を受ける資格を得た。この高等文官試験には、進士と明経の2科があったが、このうち最も栄位とされ、難関であった進士科を受けた。やがてときの長安の慈恩寺<sup>13)</sup>の塔に合格者が掲示されたが、あっぱれ、仲麻呂の名も、間違いなく見受けられた。

ちなみに今回、平和日本の象徴天皇が初訪中されるに当たって、中国屈指の重要文化遺跡である、まさしくこの慈恩寺の大雁塔<sup>だいがんとう</sup>に登られると承る。いまにして玄宗や仲麻呂が健在なりせば、誠実なお人柄の天皇は、にこやかに握手を



慈恩寺：大雁塔〔注13〕参照〕

天皇参拝さる(1992年)

交わされるであろうと、われわれは恐れ入りながら拝察申しあげている。

さてほどなく正式に唐朝の官僚となったが、最初の官職は、皇太子の御殿である左春坊司經局の校書に任官したが、いかにも学者にふさわしい職務である。

さらに『唐書』 卷220 日本古倭

奴也〕に、「朝臣仲満(仲麻呂)、華を慕いて去るを肯ぜず、姓名を易えて朝衡といい、左補闕を歴て、儀王友」に拔擢された、とある。儀王友とは、玄宗の皇子数十人中の第12王子であった儀王・李璣付きの学友を意味するが、ここにも玄宗に見込まれた、信任の厚さが想像される。

さらに機械や兵器庫を管理し、宮城警備長官を補佐する、次官級の衛尉少卿に昇任したが、これは四品官なる第4の高位に当たる。

ところがやがて、数ある留学生のなかから選ばれて、秘書監にまで栄進してしまった。こんにち、例えば、『日中親善』というキャッチフレーズが掲げられているが、世界の玄宗皇帝と、日本の一市民たる仲麻呂との関係を見るとき、ただならぬ史実であると思われるので、節を改めて吟味してみたい。

### 3. 秘書監としての仲麻呂と、玄宗の知遇

思うに秘書省は、さきにも解説したように、後漢の桓帝のときに置かれて以来、1,212年間にも及んで、皇室の蔵書を管理し、運用する膨大にして重要な機構であった。その主席長官が秘書監であり、官階でいえば従三品の位階に相当して、中央機構のばあいには、吏部・戸部の尚書侍郎<sup>14)</sup>の間であって、大臣位という高い位置にあった。

〔『新唐書』 志第37 百官2〕では、「掌經

籍図書之事、領著作局」と記録しているが、閣僚クラスに当たり、次官は少監といい、著作局のみならず、太史局をはじめ、7つの主要な属官<sup>15)</sup>を従えていた。なおこの官職は、任期は2年から数年と長くはないが、歴代、学識経験を極めた碩学が勅任されていることに気付かされる。

こんにちに名を残す著名な諫臣で、前篇でも触れたように、39歳という若さで任命された令狐德棻をはじめ、綺羅星のごとく魏徵、虞世南、顔師古、馬懷素、褚無量、元行沖、徐堅らの顔ぶれが指摘される。実に学者としての業績ばかりでなく、省にあっては、少監以下を督励して、天下の書籍を搜集し、整備してきた局面についても既述したが、思えば玄宗時代の図書館行政をして、黄金時代たらしめた。

このような中国図書館史上にあって、異国の一留学生が、栄誉ある勅命を受けて信任されていたという千二百有余年前の、まぎれもない史冊は、ひとえに驚異に値する。閣議を経て、ときの皇帝に任命されたわけであるが、ここに仲麻呂が、いかに玄宗の恩遇を勝ち得ていたかというさわりは、以下のいきさつに注目すれば、思い半ばに過ぎるものがある。

さてこの機に及んで取り上げたいのは、1980年のこと、中国の図書館学者である張白影氏が、『図書館学報』誌<sup>16)</sup>の中で、中国図書館史上において、「日本の朝衡(仲麻呂)は、一朵の桜花である」というサブタイトルのレポートを発表した一事である。もとよりこのような記事は、中国でもまれなことであるが、そのきっかけは、おそらくや後述するように、その1~2年前、日中相呼応して、仲麻呂の記念碑が建立されたことが、執筆の動機になったものと思考している。

すなわち張氏は、昔日における日中友好の立役者としての、仲麻呂の存在を、図書館人としての立場から高く評価して、文章をもって天下に顕彰したものと、われわれは感銘を受けたので、改めて端的に見直すこととした。

そこで、一言をもってこれを覆うならば、実に、日中修交の歴史的起源から説き起こし、そ

のうち仲麻呂こそは日本人でありながら、玄宗の優遇を得て、生涯を中国の官界に捧げ、しかも大詩人や学匠らとも交遊して、偉大な貢献を果たしてきた。このように生きいきした美談ともいべき史実を、古い史籍を駆使して、手短に蘊蓄のほどを披瀝している。

加えて、この最後を締めくくるに当たって、「讓我們両国図書館工作者、在中日友好不斷發展的又一個春天、共同澆灌出一上朶燦爛奪目的友誼之花吧！」との雄叫びがみられる。まことに現代においても、中日の図書館人は相携えて、両国発展のために尽力して、燦然たる友誼の花を咲かせようではないかと、中国側から呼び掛けているのが、ひととき印象深い。

ついで、拙稿の筆者らは、日本の図書館人として忸怩たる思いにひたりながら、張氏の熱情を、真っ向から襟を正して、厳粛に受けとめざるを得ない。

でも彼の論調のなかでいささか気掛かりになる課題は、仲麻呂が秘書監に任ぜられた時期についてである。すなわち彼は、おおよそ753年から761年までの9年間である、と指摘しているが、果たしていかがであろうか。

なぜならば後述するように、この年の11月15日は、四つの船で船団が結成され、仲麻呂は藤原清河とともに第1船に乗り込み、翌日には東のかた益久島目指して帰国の途に出発した年に当たる。

他方、仲麻呂が親交を得ていた詩人の包佶も、



吉備真備

後年秘書監に勅任されている（後掲）。ところが彼は747年の進士であるから、勅命されたのは、仲麻呂の後任として、もしくはさらにそのあとのことに違いない。

いまひとつ考えられることは、これまた後で触れたいが、752年に藤

原清河の一行とともに、2人の副使の1人として、2回目の渡唐をしてきた吉備真備をめぐる一件である。

このおり玄宗の勅命によって、晴れの接待主任として、熱烈な歓迎役を果たした責任者が、ほかならぬ、仲麻呂その人であった。

その迎賓ぶりにみられるクライマックスは、なんといっても自国の高位高官、貴族ですら容易に入室を許可されない帝室文庫や、神聖な三教殿への案内役を任されたのも彼である。まさにこのころすでに彼は、皇帝から、文官として、学者として、最も信望厚い秘書監兼衛尉卿<sup>17)</sup>という、きわめて重要なポストに就いていたとみるのが、至当であろう。つまり、すでに帝室図書館長兼皇城警備長官として、堂々の活躍をしていたればこそ、その前年、玄宗に日本への賜暇を願いでたとき、中なかに認可されなかった真底が察せられる。

このときまた玄宗は、一行が長安を辞去するに際して、清河には特進<sup>18)</sup>を、副使の古麻呂と真備には、銀青光祿大夫<sup>19)</sup>という位階を賜わるのみか、3人はさらに、有名画家に画かせたそれぞれの肖像を贈っている。これまた仲麻呂より玄宗への、意見具申の賜物といってもよからう。

しかも大使らが別離に際して感激の謝辞を述べたとき、玄宗はかしこくも、親しく詠じた次の詩を一首賜わった。

日下 殊俗に非ず  
天中 会期を嘉す  
余が義を懐くことの 遠きを念い  
爾が途を畏ることの 遙なるを矜む  
海を漲らせ 秋月を寛くし  
帰帆は 夕 颯に駛せん  
因りて驚く 彼の君子  
王化の遠く 昭々たるを

『全唐詩逸』

玄宗は自身も作詩活動を行っているが、後掲のように李白が翰林供奉<sup>20)</sup>に招かれたのも、詩文をめぐるの呼びかけであった。

つまるところこのように、外国の使臣を迎えて、並外れの歓待を賜わった所以は、ひとえに

仲麻呂が、臣下の身でありながら、このころすでに最高ともいえる知遇を受けていたからにはほかならない、と判断できる。

#### 4. 仲麻呂と、真備・玄昉との運命の出会いと、数奇な別離

717年3月下旬、4艘<sup>そう</sup>の船は、幸いにして漂流も、遭難にも際会することもなかったが、しかし造船技術も未熟そのものであった船体に身を任せて、魔の支那海<sup>どとう</sup>の怒濤を乗り切って、奇跡的にも揚子江へたどりついたのは、13日めの昼前である（前掲）。ようやくにして目的とする長安に着くことができたのは、10月1日のことであった。



玄 昉

この大世帯の一行のうち、最も見劣りのする第4船に運命を托し、いわば死生苦楽を共にしてきた青年の留学生・仲麻呂と真備、および留学僧の玄昉との間で、僧俗を代表する三幅対<sup>さんぷくたい</sup>の出会いが、

やがて始まったばかりである。

ときはあたかも玄宗の44年間にわたる長い治世のうちの、前期の「開元<sup>かいげん</sup>の治<sup>ち</sup>」世下<sup>せいか</sup>にあって、大唐帝国の最盛期に当たった。国際的大都市、都・長安は繁栄の頂点に達していたときであるから、いかに予想していたとはいえ、それぞれに、目を白黒するばかりであった。

ちなみに「貞観<sup>じょうがん</sup>の治<sup>ち</sup>」を築いた太宗の貞観初年の農家戸数は、おおよそ300万戸でいどであったが、約100年あまりを経た開元末年には、戸籍簿登録数のみでも、841万戸、人口は5千万人近くにもふくらんでいたといわれる。

こうした国是の明け暮れ<sup>ほうちやく</sup>に逢着した留学生の同期の桜は、表向きは奈良の比ではない地上の樂園ではあるが、歓喜や感動、はたまた感傷にばかり浸ってはいられない。たちまちに、無言の競争意識に駆られながら、おのがじし、別々

の道を独歩することになった。

真備は5つ年長であり、同じく俊秀の誉れ高い身でありながら、仲麻呂のごとく太学へは入学できなかった。元来、負けじ魂の権化のような真備にとっては、さぞかし自尊心が許されなかったことであろう。

ところが、故郷を離れて異国で生活を共にする仲間たちのこと、そこはかとなく違和感を覚えながらも、またいつ帰国できるか、そのあてもなく、頑張り通し、我慢を続け得たのは、ひとえに、同期生の仲麻呂が、この長安に存在していてくれたればこそと、何事につけ、その思ひ<sup>つ</sup>は募るばかりであったろう。

いま一人は、そろって入唐した玄昉<sup>げんぼう</sup>の存在も忘れられない。玄昉といえは、唯一の学問僧として厳選された同期の俊僧で、卓越した頭脳の持ち主であった。玄宗は彼を三品に准ぜられる紫<sup>けさ</sup>の袈裟を許したほど、皇帝の信任と榮譽を得ていた。

さて真備と玄昉とは、肝胆相照らす仲ではあったが、一方の仲麻呂と玄昉の間柄といえは、諸般の事情を察するところ、同期生とはいえ、年長の玄昉とは、かなりの懸隔感があったものと見通される。つまり潔癖症の仲麻呂にとっては、玄昉は世俗的な一面がうかがわれて、学問僧としての自覚が欠如しているとのイメージを、心のなかでは浮べていたのではなかろうか。

また仲麻呂は、学問的な才覚に加えて、生まれながらにして詞藻に富んだ文人はだの一面もあるため、これまた詩人でもあった玄宗からは、この分野でもおぼえめでたく、さらに早くから王維<sup>おうい</sup>、儲光義<sup>ちようこうぎ</sup>らと、やがて李白、杜甫らとも交遊が深まるにつれ、この点で真備や玄昉も、反面では手の届かぬところに存在した。

他方ではさらにまた真備は、仲麻呂<sup>21)</sup>の謙虚な人品、物心両面にわたるさりげない友情的支援も、身に染みて吸み取っているため、その恩恵のほどは、わかり過ぎるほどであったに違いない。

ともあれ、互いに腹を割り合える間柄のなかでも、えもいわれぬ複雑微妙な心情が交錯しているといえは、思い過ごしであろうか。

ときまさに733年、多治比広成<sup>たじひろなり</sup>を大使とする第8回遣唐使を久方ぶりに迎えるや、かれら3人組は、そろって大使らの帰国船に同乗して帰郷する機会を目前にした。ところが翌年の帰航を前にして、帰朝<sup>かんと</sup>を思い留<sup>とど</sup>めてやまなかったのは、たれあらん肝心の仲麻呂<sup>かんにん</sup>その人であった。他の2人の心中やいかに。

もとより帰国の決断を躊躇したのは、仲麻呂自らの身勝手によるばかりではなかった。〔『冊府元龜』 卷971 外臣部、朝貢4〕によれば、「在唐の阿倍仲麻呂<sup>あへなり</sup>（朝衡）、日本に帰国せんことを請う。玄宗許さず」という、のっぴきならぬ一大事を控えていたのであった。

それにもかかわらず、相携えて懐かしの故郷へ錦を飾るように、最も信頼しなければならぬ同期生・真備が、八方にわたり口を極めて忠言を尽くし、勧告して、警句の果ては哀願<sup>がえ</sup>しても肯んじない仲麻呂であった。

やむなく翌734年10月、真備は、儀式書、曆書と天文観測用具、樂書と樂器、工芸品や武器などを携え、かたや玄昉は、経論五千卷と仏像<sup>22)</sup>をもたらし、晴れの帰国者として、大使とともに第1船に同乗した。思えば18年間あまりにも及んで苦楽を共にしてきた仲麻呂を長安に残して、決別しなければならなかった。これこそ運命の別れ道、お互いの心中や、いかばかりであったろうか。

ちなみに第2船は、南海の漂流地から陸路長安へ帰り、おりから玄宗の思召<sup>おほめ</sup>により、幸運にも、また仲麻呂の並なみならぬ取りなしで、736年、こんどこそは無事帰朝できたという一幕もあった。

思えば片時も忘れたことのない母国の土を踏んだ真備と玄昉は、それぞれに起伏の多い人生航路を歩むことになった。片や異国に留まった仲麻呂は、はるかに故郷へのやるせない心を押えつつ、さらに意志をかき立てて、累進の道を上るのであった。

長安と奈良にあって、別べつにまたしてもドラマを演ずること18年、長くもあり、短くもあったであろう。

こうした矢先、752年のこと、第9回遣唐使

が任命されるうわさを聞き及んだ真備は、如くなく策動し、請願して、首尾よく選ばれることができた。大使は藤原清河<sup>ふじわらのきよかわ</sup>、副使は<sup>おおとものこまろ</sup>大伴古麻呂、いま一人は、あたかも吉備真備<sup>きびのまきび</sup>が任命された。

晴れの首途<sup>かど</sup>を目前にした真備の胸中<sup>けんしん</sup>は、別れて18年間、離ればなれに、ともに研鑽を積んできた仲麻呂が懐かしく、慕わしく鶴首しているに相違ない。おまけに直じきに教授を賜わってきた恩師である趙玄默先生はじめ、かつての同志たちも待ち受けていてくれる恋しさは、明け暮れ、忸怩<sup>じくじ</sup>たるものがあつた。

ところが三幅対のいま一人の玄昉は、同船して帰国後、日本仏教の発展に寄与して、朝廷からは紫の袈裟<sup>けさ</sup>を許され、僧正<sup>そうじょう</sup>にまで上ったが、晩年、筑前の観世音寺へ左遷されて、6年前の746年6月18日<sup>23)</sup>、この配所で恨みを飲んで憤死してしまった。

しかしながら、大願成就して仲麻呂との再会を実現し得たときの感慨は、いかばかりであったろうか。抱き合って感涙にむせんだに違いない。

ひるがえって仲麻呂は、別項でも述べたように、帝室図書館長として、はたまた勅命によって迎賓担当の閣僚として、清河一行を熱烈歓迎した。あわただしいなか折をみて、真備とは18年に及ぶ積年の思いを語り合った仲麻呂は、今度こそは帰国の決心を固めたのであった。

留唐36年、長安を去り難い思いに苦悩しつつも、この機を逃しては、老い先短い懸念を抱えて、またいつ帰航し得ようと、周囲の勧めもあって、意を決して玄宗に胸のうちを直訴した。

果たせるかな、すぐには賜暇は得られず、説得されたが、遂に次のような趣旨で裁可が得られたのであった。

すなわち唐朝からの特派使節として、日本からの遣唐使に随行するという形式で、さしもの玄宗も思慮を新たにして、日本への帰国を認可した。されど36年にもなんなんとする仲麻呂の減死奉公ぶりを回顧して、さぞかし断腸の思い一しおであつたろうと拝察される。

ようやくにしていざ帰朝できる身になると、長安の人になり切っていた我が身にとつ

ては、今度は却って、唐朝がいかにしても去り難く、後ろ髪を引かれる思いが過ってきたのは、当然のなりゆきであった。

とはいえ何ごとにつけ、おりおりに夢みた故郷の風土を踏みしめることができる仲麻呂、詩友を始めとする長年にわたる友生たち、ひざ突き合すのも今日かぎり、万感胸にあふれる惜別の宴が開かれた。正客の仲麻呂自らも心中を詠じているが、他方、あとでも掲げるように、友善の詩人たちが、こもごも切せつたる惜別の詩文を贈るのであった。

名残は尽きず果てしはないが、互いにたもとを分かつたねばならない瀬戸際に立った。54歳の仲麻呂は、清河らの一行に加わって、10月15日、住み慣れた、さまざまな想いが繰り成す長安を後にすることになった。

あとでも解説したいが、揚州延光寺に待機していた鑑真を、上足の弟子普照が訪ねて同道し、手に手をとって川を下り、蘇州黄泗浦に到着した。ついては長安からはるばると港まで送ってきた、別離を惜しむ朋友も少くはなかった。ところが出航が遅れて、遂に11月15日になってしまった。

この滞留中のある日、おりから皎皎たる明月が昇るや、仲麻呂は、さまざまな感情が胸に迫って、大和言葉をもって、一首の和歌を詠んだ。

あまの原 ふりさけ見れば 春日なる

三笠の山に 出でし月かも

今日まで1,230有余年、延延として人口に膾炙されている名歌<sup>24)</sup>であることは、いうまでもない。項を改めて鑑賞してみたい。

平家物語には、生者必滅、会者定離とうたっている。仏教でいう八苦の一に、愛別離苦なる苦悩がみられる。ともに釈尊の教えを伝えているが、ここで、仲麻呂と真備らとの出会いは、そのまま、シナリオにもみられない、数奇な離別を迎えねばならない運命が控えていた。

げに、筆舌し難いさまざまな思いを込めて、寒さも加わってきた753年11月15日、仲麻呂は晴れの帰国者として、大使藤原清河の第1船に乗り込んだ。第2船は副使古麻呂、鑑真ら、真備は第3船であった。第4船は、判官<sup>25)</sup>以下。

いざや、益久島目指してそろって出帆したが、支那海上で、やがて懸念し、心配された台風に遭遇してしまった。ところが今回も、真備の第3船が真先に、他の3船は相前後して、数日のうちに、阿児那波島(沖繩島)<sup>26)</sup>へ到着することができた。

しばし漁民部落が点在する荒涼たるこの島で、再び仲間たちと東の間の顔を合わせて、ひたすら諸準備を整えること10日あまり。12月6日、第2、3、4船が相次いで再出発し、やがて益久島(鹿児島県屋久島)へ近づいたころ、仲麻呂らの第1船が出発することができた。

まさしくここに、船と船との別れが、そのまま仲麻呂と真備との、とわの別れになってしまったのである。あまりにも舞台が暗転した悲劇的なドラマの前兆であるという他なし。

幸運にも真備の乗り込んだ第3船は、暴風雨に遭遇しながらも、北上して一気に紀州牟漏崎に漂着、まもなく2、4船も日時の差こそあれ、くびすを連ねて到着することができた。〔『続日本紀』 卷19 孝謙天皇〕。

これに反して最も造船技術としては性能の高いとされている仲麻呂らの第1船は、またまた東支那海を襲った大台風のため、木の葉のように南へ南へと吹き流されて、遂に安南北部の驩州の沿岸へたどりついたのであった。

おまけに不運にも原住民に襲われるという惨事に直面して、一行180余人のうち、わずかに生き残った者10余人。ところが何と奇しくも、この生き残り仲間のうちに、清河と仲麻呂の名が連ねられていた。まさしく九死に一生を得た彼らは、翌755年6月、得も言われぬ思いをかみしめ、励まし合いながら、世はまさに安祿山が反して洛陽を占拠し、交通も消息も断絶してしまって、荒廃も甚だしい長安へ、命からがら迷い戻ることができた。

こうした苛酷極まる、吉凶禍福がこもごも織り成す運命劇に噴まされながらも、清河と仲麻呂は長安で、真備や鑑真は平城で、骨を埋めるまで、互いの琴線は、折節にも、ほつれることはなかった。

顧みるに仲麻呂らの行方不明の報が太宰府よ



り朝廷に入ったのは、翌754年3月のことである。わずか4か月ほど前、益久島目掛けて阿児那波島を船出したとき、第3船に乗り組んだのは真備であった。しかるに第1船に同乗した運命劇のヒーローの訃報が、おのれの耳に伝わってきて、真備の胸中や、いかばかりであったろうか。

一方の中国大陸では、あたかも放浪の旅を続けていた李白の耳に、そこはかとなく届いた訃音に、てっきり仲麻呂が、果てしなき怒濤渦巻く魔の海で、海底の藻屑となってしまったと思ひ込んで、歌いあげた慟哭の詩が「晁卿衡を哭く」である。後述するように、永遠に刻まれて残る、宿命を背負った悲劇性一ぱいの名詩といえよう。

## 5. 詩友との値遇



李 白

### 李白—中国詩壇

史上、最大の2人の詩人は、李杜と並び称されている李白<sup>27)</sup>と杜甫<sup>28)</sup>であることは、いうまでもない。

そのひとり李白の一生は模糊としていて、謎に包まれた生涯を送り、謫仙人とも呼ばれ

もした不遇な、諸国漫遊の天才的詩人であった。

性格は自由闊達、豪放磊落、彼一代のうち、前後4回結婚し、いずれも妻子を置き去りにしたまま、人生のほとんどを旅に出放しで、その足跡は遍く全国に及んだとも評されている。自ら青蓮居士と号していたほど、禅僧的風格がみられるようである。でも思想的にはむしろ、杜甫が儒教的傾向にあるに対し、彼には道家的な一面が見受けられた。

こうして家庭的に落ちつくことなき吟遊詩人と、仲麻呂との出会いは、長安においてである。すなわち李白42歳の742年のこと、詩文の世界でも理解のみならず、造詣も深い玄宗に招かれて、皇帝側近の侍従職である翰林供奉に抜擢さ

れ、手厚い職責に登用されたのが、機縁といえる。

なにしろ科挙の試験を受ける気もなかった野人が、初めて官途に就いたのが、そもその出会いである。しかし3年も続かずに、高力士<sup>29)</sup>らの側近と衝突し、疎まれて失脚してしまった。所詮、宮廷世界向きの人間ではなく、翌々年には長安の生活には別れを告げ、在京わずか足掛け3年にして洛陽に向い、その夏には当地で杜甫に知り合った。杜甫30歳のときに当たる。

旅先ではさらに高適<sup>30)</sup>や岑参<sup>31)</sup>など、当時不遇であった詩人たちともめぐり合って意気投合し、詩酒の交わりを深めていった。

こうしてみると、仲麻呂が、李白と入魂の交わりをもったのは、長安の宮廷においてであって、相見えたのは3年にも満たないことになる。おそらく3年先輩であるのみか、詩人として天賦の才能に恵まれている仲麻呂に、李白の方から心酔してしまったほどである。仲麻呂はまた、野人性たっぷりの李白の人間性のなかに、天稟の冴えが秘められている真性を洞察して、詩文を通じて深交が繰り広がり広がっていった局面が推し量られる。

中国西安市の由緒ある興慶公園に鎮座します「阿倍仲麻呂記念碑」(後述)の向って右(西面)に奉掲されている七言絶句には、「李白哭晁衡」と署名されているごとく、まさしく李白自作の詩である。

仲麻呂と藤原清河とが同乗した帰朝者らは、暴風のため遭難して安南へ漂着した。そのおり、誤報が伝わって、たしかに溺死したものと悲嘆に暮れて、ありし日の朝衡を偲んで、思わず哭泣(声をあげて泣く)して詠じた、動転の詩といえる。

日本の晁衡は 帝都を辞し

征帆一片 蓬壺を遶る

明月帰らずして 碧海に沈み

白雲愁色 蒼水に満つ (原文後述)

日本の仲麻呂は長安をあとにし、征りゆく帆の一片は、神仙の島といわれる蓬萊をめぐってゆくようにみえた。しかし、船は青海原の底に沈み、明月のごとく清らかな人は、ついに不帰

の客となってしまった。南海の空に満ちわたるものは、白い雲と、人びとの憂い悲しむ顔つきのみ、と、茫然自失の態で最後を結んでいる。

追って、李白が仲麻呂遭難の報に接したのは、翌754年5月に、広陵で魏万<sup>32)</sup>に会ったときのこと。その際に李白は、はからずも、かつて長安に在留していたおり、仲麻呂から贈られた記念の布で作った衣服を着ているときであった。

魏万に贈った詩のなかに  
身に日本の裘を着け  
昂蔵 風塵を出ず

とあり、李白は自ら次のような注をつけている。

裘は則ち晁卿の贈る所にして、日本の布にて之を為る

とあるが、ここにいう裘とは、皮ごろも、毛ごろもの類で、当時貴人が着用した温服。これを着て、意気旺盛の気概で俗世界を離れてゆくという風情であろう。かくしてここにも、彼は詩仙とか謫仙とも称されているように、その風貌や行動にも幻想的な神仙の世界をあこがれ、浮き世を離れて自由奔放に、架空の領域を飛翔したいという発想が、ひしひしとうかがわれる。

そこで上記のように、李白は揚子江のあたりを放浪中、たまたま広陵で出会った魏万と共に金陵(南京)へ行き、再び宣城から秋甫<sup>33)</sup>へ移っている。まさしくこの時に作られたのが、かの『唐詩選』にも残されている「白髪三千丈……」というべし。

日本の教科書にまでなじまれているこの詩は、彼が長安を追われてから、すでに10余年にもなる。白髪はいまや増すばかり。秋甫河を岡の上から眺めていると、眼下にはひと筋の、白髪のごとき白い糸となって、はるか彼方まで延びている。しかし、長安はまだその先のさきである。白髪の愁いに輪を掛けて長嘆息しているところへ、仲麻呂の悲報に接し、思わず慟哭の詩がほとばしってきたものと、はるかにおしはかれる。

やがて彼の晩年を顧みるに、長安を飛びだして遍歴の旅を続けるうち、安祿山の乱に出くわし、まき込まれて死罪の宣告を受けた。ところ

が親友のとりなしで減刑され、貴州の西南にあたる夜郎へ流される途中、大赦に浴することができた。

その後はまたまた気の向くまま、江南地方を転々とさまよい、挙句の果ては、ときに安徽省の県令として羽振りをきかしていた親族で、篆書家としても著名な李陽冰<sup>33)</sup>のもとに身を寄せているうち、あわれ発病してしまった。こうしてこの旅路で、大詩人としての62年の生涯を全うした。玄宗の逝去の後を追うように、その半年後の762年11月のことであった。

王維一詩友たちが主催して開かれた送別の詩筵は、尽きせぬ名残の裡にも盛会であった。なにしろ千有余年にわたり、その名声をとどろかせている詩伯たちの集聚のこと、贈別された詩情は、万古に輝いている。

もともと今日まで著名を馳せている詩匠たちのなかには、いはば進士ないしは明経の試験に及第して、皇帝のもとに任官した官僚出身者が、きわめて多いことに気付かされる。それというのは、高等文官試験に合格するには、経学や史学が主要科目とされていたが、合わせて詩文にも長じていなければ至難であった。

関連して回顧するに、役所勤めの官署機構のなかにあつては、古来から、家族や朋友と別れて、遠国、近国へ、とりわけ単身赴任しなければならないのが常道とされている。

ところが、人とひととの別れ、仲良し仲間との別働、愛する者との別緒は、釈尊の説法そのままに、愛別離苦の苦しみ、悲しみ、寂しさの心境は、その人のみぞ知る宿運というべきか。いかにも交遊が長ければ長いほど、情宜が深ければ深いほど、傷心の痛手には限りがないであろう。

こうした過ぎこしかたからのめぐり合わせから、中国文人墨客たちで、設けた別離の宴席においては、送別の詩文を餞として贈る風習があった。わけでも唐代では盛んであつて、『全唐詩』所収のもの始め、名詩が何と多いことであろう。

日本においても平安朝の歌の社会で、男女の

恋愛が懸け橋となったように、唐代の詩友たちのあいだでは、おのれのやるせない思情を、詩に託したのであった。泣いて別れても笑顔で送っても、贈られた詩は、常しなえに残るものである。みごと今日まで、実に千年以上にも及んで、詩壇に伝承されている惜別の詩も、その数があまりにも多い。

そのうちのひとり、王維<sup>34)</sup>もまた李杜と並ぶ盛唐を代表する詩仙であり、音楽の達人でもあった。そのうえ、南画の祖師と仰がれるほど、山水画の名手であり、書家としても巧名をあげていたほど、多彩な作品を残す、多芸多才な文化人であった。

かれは字の摩詰<sup>まきつ</sup>としても知られ、晩年の官職名により、王右丞<sup>おうじやう</sup>とも呼ばれている。かたやまた事実とはもあれ、李白と同年の701年の生れともいわれている。なお本稿では仲麻呂は、李白よりも3年前の生誕であると、杉本直次郎<sup>35)</sup>を支持しているが、論者のなかには、李・王および仲麻呂の3者を、同年生れであると説いているほど、小説めいた生誕説もみられる。

ともあれ開元初年、進士に首席で及第して、大楽丞<sup>だいがくじやう</sup>（儀式の音楽を司る役所の次官）に就き、しだいに官途を進んでいったが、761年に逝去するまで、仏教信者としての思想的特性をもつ宮廷詩人であり、自然詩人でもあった。

さてここで、王維が仲麻呂に贈った『送秘書晁監還日本国并序』を紹介しなければならない。

秘書晁監の日本国へ還るを送るという標題は、秘書監の晁（朝の古体字）衡、つまり仲麻呂を指す。すなわち官職名の間に、姓を挿入するならわしによったものである。

ついてはこの詩には、546字からなる長い序文が付いている。それというのは、こうした詩酒の宴席で、詩友たちが作詩したばあい、序文を附けて総まとめにして1冊に編集し、旅立つ人に餞<sup>はなむけ</sup>として贈るのが習わしであった。そこで王維が代表者に選ばれて、一同の意向を吸収して執筆したものと思われる。

序文では、まずは冒頭に「舜の群后……禹の諸侯」の伝説に始まり、「開元天地大宝聖

文神武応道皇帝（玄宗皇帝の尊号）は大道を之れ行ない」と、帝の行跡を称賛し、「海東の国、日本を大と為す。聖人の訓<sup>おしえ</sup>に服し、君子の風あり。正朔<sup>こよみ</sup>は夏の時に本づき、衣裳<sup>いしやう</sup>は漢の制に同じ」と、日本は中国の正統的な文化、伝統を受け継いだ、君子の風がある国であると称揚している。続いて、「我れ爾<sup>なんじ</sup>を詐<sup>いつわ</sup>ること無く、爾も我を虞<sup>おそ</sup>ること無かれ」と、信頼関係にあって、腹藏なく、闊達な交流を結ぼうと綴っている。

さらに続けて、君は入唐して「名は太学に成り、官は卿に至れり」と、中国の学問を存分に吸収し、官は客卿（外国からきた大臣）を極めた。帰朝後も、中日文化交流に、必ずや貢献してくれるであろう。「子、其れ行けや、余は言を贈る者なり」と、比喻絶妙にして含蓄深遠な、しかも長文の序文を結んでいる。繁をいわず、次に掲げてみよう。

積水不可極	積水	極むべからず
安知滄海東	安	ぞ知らん 滄海の東
九州何處遠	九州	何れの処か遠き
萬里若乘空	万里	空に乗ずるが若し
向國惟看日	国に向	ただ日本を看
歸帆但信風	帰帆	但だ風に信すのみ
鰲身映天黒	鰲身	天に映りて黒く
魚眼射波紅	魚眼	波を射て紅なり
郷樹扶桑外	郷樹	扶桑の外
主人孤島中	主人	孤島の中
別離方異域	別離すれば	方に域を異にす
音信若為通	音信	若為して通ぜん

（『全唐詩』巻127、『王右丞集』巻12）

大洋のはて いやきわみなく  
知るよしもなし 青海原のその東  
天<sup>あま</sup>がした 何処<sup>いずく</sup>がいちばん遠きぞや  
万里の船路は 虚空<sup>そら</sup>を泳ぐごと  
国に向けては 日輪<sup>にちりん</sup>を目指すのみ  
帰<sup>き</sup>り路船は ただひたすらに風まかせ  
大海亀は 空に黒ぐろ  
怪魚の目玉は 波間に紅<sup>あか</sup>あか  
君が故国は 神木のかなた  
貴公まさしく 孤島の人なり  
たもとを分かつてば 別世界の人  
音信<sup>おとづれ</sup>するには いかが通ぜん

詩友たちから贈られし詩文を受けた仲麻呂は、『(君) 命を銜<sup>う</sup>けて、国に還るときの作』と題して、まず一詩を詠じてこれに答え、また、詩友たちに愛剣を贈った。

銜命將辭國 命を銜<sup>う</sup>けて 將に国を辭せんとす  
 非才恭侍臣 非才にして 侍臣<sup>かたじけな</sup>を 恭<sup>こい</sup>くせり  
 天中戀明主 天中に 明主を恋し  
 海外憶慈親 海外に 慈親<sup>おも</sup>を憶<sup>う</sup>  
 伏奏違金闕 伏奏して 金闕<sup>きんけつ</sup>に違<sup>わか</sup>  
 駢驂去玉津 駢驂<sup>ひさん</sup>して 玉津<sup>ぎょくしん</sup>を去る  
 蓬萊卿路遠 蓬萊 卿の路遠く  
 若木故國隣 若木 故国に隣る  
 西望懷恩日 西望して 恩<sup>おも</sup>を懷<sup>おも</sup>う日  
 東歸感義辰 東歸して 義に感ずる辰<sup>とき</sup>  
 平生一寶劍 平生の 一宝劍  
 留贈結交人 留めて 交<sup>まじわ</sup>りを結ぶ人に贈る

(『文苑英華』 卷296)

勅命を受けて長安を辞するに当たり、天子、親友のことを憶<sup>おも</sup>うばかりなり。宮中に別れを告げて、遠き故国に帰らねばならない。東西互いに義に感じ、恩<sup>おも</sup>を懷<sup>おも</sup>うよすがとして、平生帶持していた愛剣を贈って、交<sup>まじわ</sup>りを結びたい、と。

儲光羲一仲麻呂と親交のあった儲光羲<sup>ちよこうぎ</sup><sup>36)</sup>も、彼に五言の詩を贈っている。

彼は袁州、つまり今の山東省滋陽の人。儲と朋友の願況<sup>えんきやう</sup><sup>37)</sup>が呈している『監察御史儲公集序』<sup>37)</sup>によれば、726年の進士で、同期の及第



謝 靈 運  
(三才図会)

者である貝外郎<sup>38)</sup>の崔国輔ははじめ、当時一流の受験者、数人をしのぐ成績でパス。任官して監察御史に登ったが、安祿山の反乱の節、賊軍に降ったため、乱後、嶺南に流されて没している。彼の生年は700年から706年、卒年も759年と760

年ともいわれ、やや開きがあるが、おおよそ742年前後在世した人。その詩は、六朝の陶淵明<sup>めい</sup><sup>39)</sup>、謝靈運<sup>しやれいゆん</sup><sup>40)</sup>らの流れを吸んで、最も山水田園の詩に長じていて、王維や、孟浩然<sup>もうこうねん</sup><sup>41)</sup>、韋応物<sup>おうふつ</sup><sup>42)</sup>らと肩を並べていた。

今に残るもの237首。そのうち『全唐詩』巻138)に収められている「洛中胎<sup>おく</sup>朝校書衡」、朝即日本人也」、つまり「洛中の校書郎である朝衡(仲麻呂)に胎<sup>おく</sup>る。朝はすなわち日本人なり」が伝わっている。次に吟味したい。

萬国朝天中 万国 天中に朝す  
 東隅道最長 東隅の道 最も長し  
 吾<sup>一作長</sup>生美無度 朝の生れながらの美<sup>はか</sup>度<sup>つか</sup>り無く  
 高駕仕春坊 高駕して 春坊に仕う  
 出入蓬山裏 蓬山の裏に 出入し  
 逍遙伊水傍 伊水の傍に 逍遙す  
 伯鸞遊太學 伯鸞 太学に遊び  
 中夜一相望 中夜一たび 相望むに  
 落日懸高殿 落日 高殿に懸り  
 秋風入洞房 秋風 洞房に入る  
 屢言相去遠<sup>しばしば</sup> 屢 言う 相去ること遠しと  
 不覺生朝光 覺えず 朝の光を生む

ここに掲げられている「朝校書衡」という標題は、姓と名との間に、官職名を入れる中国の慣習による。つまり既述したように、中国名の朝衡の姓と名との間に、ときの官職名であった校書の2字を挟んだ。

校書とは校書郎の略で、印刷術が発達していなかった時代の、写本や公文書を校正する重要な官職であった。したがって優れた学識経験者でなければ、任命されなかった。いわば官途に就いたばかりの仲麻呂に与えられた、彼に打って付けの職責といえる。

次に冒頭に挙げた洛中とは、唐都の長安に対する洛陽であって、皇太子の役所が置かれていた東都である。さらにいえば、この詩の4句めに、高駕して春坊に仕うとあるが、高駕、つまり、りっぱな乗り物に乗るような高貴な皇太子の御殿(役所)に仕官する人、という意味がある。

このようにみてくると、仲麻呂が儲光羲から

上掲の詩を贈られたのは、洛陽にあった皇太子の役所である親王府で、校書郎を勤めていたころであることがわかる。すなわち洛陽には、帝王学をトレーニングする役所が置かれていたのである。そこで仲麻呂は前掲のようにやがて栄進して、玄宗の第十二皇子である儀王の親王府で学友となって、さらに衛尉少卿に就任している。

ここに登場した李璣<sup>りすい</sup>の弟である寿王・李瑁<sup>りもう</sup>（玄宗の第十八皇子）の役所も、同一のキャンパスにあった。いまにしてみれば、前篇に掲載した天下の美女・楊貴妃は、まさしく李瑁<sup>りもう</sup>の妃であった。



玄宗と楊貴妃との出会  
（楮人模撰：隋唐演義所収）

ついでには見逃せないのは、仲麻呂は、なんと楊貴妃が玄宗の妃として迎えられる以前から、すぐ近くの寿王府にまします妃殿下を拝顔していたという一事である。よって楊貴妃が32歳も年長の玄宗に、皇后として即位したのは740年10月のことであり、在位16年めに殺害されているが、端的にいても、仲麻呂はそれよりかなり以前から出会いがあったことが見てとれる。

さて上記の五言詩は、仲麻呂を囲む別離の宴で贈ったものでなく、彼が官吏登用試験に見事及第して、やがて儀王府にまで累進したが、なんといっても遠国からの青年学徒、さぞかし朝な夕なに望郷の念ひとしおならんと洞察して贈った、儲光羲自身の、やるせない胸中を吐露した同情の詩であろうと思う。

そこで朝衡が、はるか異国から渡唐してきて、卓越した頭脳と、人となりの好きに加えて、優れた文藻の所持者である人物を玄宗に認められ、後漢<sup>はくらん</sup>の伯鸞<sup>43</sup>のように博学多識で、太学に学び、仕官して高貴な親王府に出入りする身分となっているところから、詩に託して詠じたのであっ

た。

そのようなわけで後半では、夜中ひとりで東方を望むこともあろうが、ときに夕日が高殿<sup>たかどの</sup>に懸り、秋風が文房の閑居にしのびよってくるであろう。おそらくや君よ、郷愁、望郷の念は、ただならぬものがある、と、彼の胸中を推し量って作詩した、儲光羲の名詩といえよう。

包佶<sup>ほうきつ</sup><sup>44</sup>—一生卒年は不詳であるが、758年前後に在世した潤州延齡<sup>あざな</sup>の人で、字は幼正。弟の包何とともに、世に二包とも称されているほどの詩人でもあって、いずれも詩集を1巻ずつ残している。747年の進士であるが、弟も進士に及第して、官界へ進んだ。

官途に就いては刑部侍郎、太常少卿、諫議大夫、御史中丞を歴任し、栄進してその間には秘書監にまで成っている。しかし前掲したように、仲麻呂の後任か、それともその後あとのことであろうと思われる。

かれにも、日本から招聘<sup>しょうへい</sup>した仲麻呂とは親交があったため、東国へ帰る先輩をねぎらって贈った五言詩が、『全唐詩』 卷205に、「送日本国聘賀使晁巨卿東帰」という標題で収められている。そこでその原文のみを掲げたい。

上才生下国 東海是西鄰 九譯蕃君使  
千年聖主臣 野情偏得禮 本性本含眞<sup>一作仁</sup>  
錦帆乘風轉 金装照地新 孤城開蜃閣  
曉日上朱輪 早識來朝歲 塗山玉帛均

趙驊<sup>ちょうか</sup>—伝は『唐書』 卷151 趙驊<sup>てん</sup>伝にも残されているが、後述の『全唐詩』所収の五言詩の序文にも少しく紹介している。

字は雲卿、河南省鄧州穰<sup>あざな</sup>の人。幼にして学を好み、開元中に進士に合格し、やがて秘書少監（秘書省の次官）に累進している。一方では顔真卿を始め、李華<sup>45</sup>、陸據<sup>46</sup>ら、名だたる人士とも親しく交遊していた。

ちなみに長安においては、前述のように仲麻呂や包佶らともども相前後して進士に挙げられて、玄宗と使えた能吏であった。詩文をめぐる、仲麻呂とは厚い交流があったことは、あからさまであるが、やはり送別の宴でも「送晁

補闕歸日本國<sup>47)</sup>」という標題の詩を贈っている。

『全唐詩』 卷129に収められているので、次のように原文のまま紹介することとした。

西掖承休澣 東隅返故林 來稱鄭子學  
歸是越人吟 馬上秋郊遠 船中曙海陰  
知君懷魏闕 萬里獨搖心

## V その顕彰碑と鑑真

### 1. 阿倍仲麻呂卿碑（日本）と鑑真



奈良市慰霊公苑(正面)

(正面：殉国者供養塔)

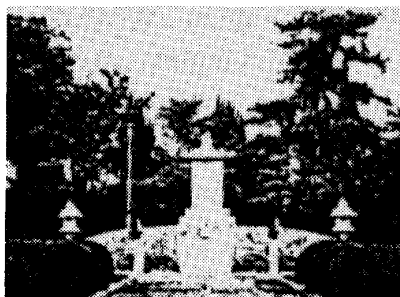
(右端：敵味方供養)

(仲麻呂の碑は、左図面外に)

この記念碑は、鑑真<sup>かんじん</sup>ゆかりの唐招提寺に隣接する奈良市慰霊公苑にあり、北面<sup>かんじん</sup>して、背面(南面)には、本文575字にわたる、昭和53年9月(調査したところ、

17日)付けの、端正な楷書で、縦書きの銘文が刻まれている。撰者は、ときの奈良市長・鍵田忠三郎氏、筆者は書家・平田華邑書による署名がみられる。

まず冒頭には、仲麻呂が、藤原<sup>ふじわらの</sup>清河<sup>きよかわ</sup>を大使とした第9回遣唐使の帰朝に同行して、ひとときとして忘れ得ぬ故国の土を踏むことになって、詩友たちら主催の送別の宴で詠じた「あまの原……」の名歌が、大和ことばで白字で印刻されている。



阿倍仲麻呂卿碑

(前掲：奈良市慰霊公苑)

さて銘記の書き出しは、「在唐三十有余年、齡五十五歳ニ達セシ阿倍仲麻呂が遙カニ祖国平城京ノ山河を偲ビ詠ジタル望郷

ノ歌ナリ」との解説に始まる。

続いて彼の略歴とともに、その人となりを称揚しているが、とりわけ「日中両国ノ友好交流ニ生涯ヲ捧ゲシ偉大ナル先覚ニシテ、ソノ功業

ニ比肩シ得ルハ、奈良朝ニ戒律ヲ伝エシ唐僧鑑真和上アルノミ」と、唐招提寺の御廟に鎮座します過海大師鑑真の存在を、強くアピールしているが、実に印象深い。

さてここで、鑑真<sup>かんじん</sup>の仲麻呂に対比し得る功業について、さらに改めて顧みなければならない。

ちなみに753年12月26日、12年間にもわたる<sup>かんなんしんく</sup>艱難辛苦(第1回めは、僧の道航のざん言、4回めは官憲による妨害、2、3、5回めは座礁や難破のため不成功)の<sup>あげく</sup>挙句の果て、身命を賭して初志を貫徹し、太宰府に着くことができたのであった。この知らせが奈良に届いたのは、翌年1月16日のことで、なにしろ鑑真との師弟関係にある命がけの集団が、6回めにしてやっと成就したのである。この間、脱落者は20人、死者にいたっては36人を出していることでも、航海のすさまじさが、ありありとうかがわれる。

振り返ってみると750年には、愛弟子<sup>ようえい</sup>の栄叡(後掲)が病没しているし、頼りにしていた補佐役の<sup>しょうげん</sup>祥彦も死去するうえ、あまつさえ鑑真その人も炎熱と塩風によって健康を害し、61歳の高齢で両眼を失明するという悲運に見舞われている。

さらにあえて書き加えたいのは、本稿に登場している日中の、いくたりかの人士をめぐるドラマティックな出会いであり、それがそのまま、永久<sup>とわ</sup>の別れとなってしまった運遇についてである。宿命の舞台にフットライトを照射してみると、前掲のように752年に、遣唐使として入唐した<sup>ふじわらのきよかわ</sup>藤原清河と、副使のひとりで、2度の訪中である吉備<sup>きび</sup>真備の一行をめぐる、悲劇的シーンが浮かび上ってくる。

ときに、さきの栄叡<sup>ようえい</sup>と同じく、第8回遣唐使として入唐し、揚洲大明寺において鑑真のもとで受戒した普照が、あたかも恩師の鑑真その人がしばしば、渡日にあたって挫折を繰り返している消息を聞いたことに始まる。いうなれば翌753年10月18日に、揚洲延光寺に鑑真を訪ねた普照は、案内役として帰朝することを申し出て、同意を得たのであった。

前記のように同年11月16日、蘇州<sup>こうしほ</sup>の黄泗浦に出航した一行の第3船には、副使の吉備真備や

普照ら、第1船は清河、仲麻呂ら、第2船は副使の<sup>おおもとのこまろ</sup>大伴古麻呂のほか、鑑真らが乗り込んだ。  
(第4船は略)。

このうち第3船は4日後の20日に、第1、2船は翌21日に、阿<sup>あ</sup>兒<sup>こ</sup>那<sup>な</sup>波<sup>わ</sup>島(沖縄)に着いた。ここを出航した清河、仲麻呂が同乗している第1船は、台風に押し流されて命<sup>べつ</sup>ずくで安南<sup>ベトナム</sup>にたどり着いた一幕については、先に見直した。しかし第2、4船は、12月7日<sup>やくしま</sup>益久島(鹿児島県屋久島)に着き、18日この島を出航した第2船は、20日に薩摩<sup>さつま</sup>の秋妻屋浦<sup>あきめやのうら</sup>(鹿児島県坊津町秋目)へ漂着することができた。鑑真66歳の時のこと。

真備の乗った第3船は、『続日本紀』<sup>むろのさき</sup>天平勝宝6年1月17日]の条に、紀州の牟漏崎<sup>むろのさき</sup>(和歌山県白浜町湯崎)へたどり着くことができた主旨を伝えている。

こうしてみると、この舞台に登場してきた人物として、まずは鑑真に出馬<sup>だざいふ</sup>してもらうことになる。ついてはやがて太宰府、難波、河内を経て平城京に到達し、良弁に案内されて、めしいた目であるが、東大寺大仏を礼拝することができたのは、754年2月4日のことであった。さらにはその翌日、鑑真は普照に対面し得たが、いかんせん、同船団の仲間であった仲麻呂や清河とは、前年11月の阿<sup>あ</sup>兒<sup>こ</sup>那<sup>な</sup>波での別離が、前世よりの宿命というか、まさしくこの世での別れとなってしまった。

こうしたいきさつを背景にして、この石碑の銘文では、日中平和友好条約が締結されたいま、いわば孔子の「温故知新」『論語』為政の精神に立ち帰って、あたかもその機が熟して、価値ある記念碑を建立するに至ったゆえんが、端的に吐露されている。そこでこの末尾の164文字の全文を転写し、この機に臨んで、襟を正して啓蒙、周知に努めたい。

「千二百六十年、歲月ヲ経テ歴史ハ繰リ返シ、奈良、西安両市ハ既ニ友好都市ノ絆ヲ結ブ。マサニ日中平和友好条約締結ノ秋ニ当リ、同志相計リ、奈良、西安両市相呼応シテ、仲麻呂ヲ顕彰スルノ碑ヲ建ツ。

日中両国友好ノ基盤ヲ定メシ不滅ノ功業ヲ称エテ仲麻呂ガ霊ヲ慰ムルトトモニ、ソノ遺志ヲ

継承シテ、日中両国子々孫々ニワタル友好団結ニ尽瘁スルノ決意ヲ新ニセントスルモノナリ」と。

ついてはこのわずかな文面に見られる文字のうち、日中の字句が3回、友好の文字が4回も躍動している真髓は、仲麻呂の在唐53年余に対し、鑑真の在日は、なんと10年足らずの表舞台ではあった。ところが、ともにともに異国のため、母国のために、一面は奇跡的に命がけで、その最後はいずれも外<sup>と</sup>つ<sup>く</sup>国の土壌と化してしまった偉業こそ、万古不易の金字塔として仰ぐべしと力説した、碑記であるとみなして、筆者らにとっては感銘おくあたわざるものあり。

## 2. 阿倍仲麻呂記念碑(中国)と李白

千二百有余年前における日本の首都——平城京右京五條二坊に、759年8月創建された鑑真ゆかりの唐招提寺(前掲)に隣接して、つつまじやかなよそおいで、奈良市慰霊公苑の一角に、仲麻呂卿碑が設けられたいきさつは、紹介したばかりである。

関連して、その137日あとのことになるが、1979年2月1日付けにて、奈良の記念碑に呼応するがごとく、同じ北面する姿で、それこそかつて、玄宗が政務を執った西安における興慶宮跡の南側に、標記した碑文の記念碑が設定された意義は、とても深長であり、うるわしい事業であるとの一語に尽きる。

ところでこの皇居跡では、近年、宮殿の床に敷かれていたタイルが発掘され、



阿倍仲麻呂記念碑(東側面)  
(中国：西安の興慶公園)



興慶宮ゆかりの沈香亭

礎石も出土した。現に沈香亭などとともに、唐代の様式に沿って修復が成り、日本から送られた桜も植えられ、西安における観光地の一つとして、慕わしい、親しまれた公園になっている。

いまにして興慶宮（既出）だけは昔日の面影を残しているが、思えば玄宗が即位した当初は、皇居である大明宮、すなわち蓬萊宮<sup>ほうらいきゅう</sup>へ入っていたが、間もなく興慶宮に移りたもうたほど、帝に愛された宮殿であった。

すでにながめてきたように、玄宗の側近の一人として仲麻呂も、おりおりに出仕したこの由緒深い、はなやかな舞台跡に、自らの記念碑が建立されて、千二百有余年を閲した現今、日中の庶民が主体となって、往時を偲<sup>しの</sup>びながら、敬虔<sup>けんけん</sup>な気持ちで参拝する姿に接するとき、自ら身に迫るものがある。

いまこの記（中国では紀）念碑も、奈良市のそれと同様に、背面（南面）には、友好の使者仲麻呂の生涯を紹介し、推賞した銘文が、威儀を正して彫刻されている。

とりわけ、終始玄宗の温遇に接し、位・人身を極め、その間、唐代随一の天才的詩仙ともいわれる李白を始め、作品を通して日本にもなじみの深い鍾<sup>そうそう</sup>々たる一流の詩人である王維、儲光義<sup>こうぎ</sup>、趙驊<sup>ちようか</sup>、包佶<sup>ほうきつ</sup>（前掲）たちとも、じかに情宜あふれる交流があったことを銘記している。この碑文の意義たるや、値千金に匹敵すると思えてならない。

さらにこの碑文の最後をしめくくった文字は、いかにも、奈良市に設定された記念碑と照応して、ときを移さずその翌年に建立した、この瀟洒<sup>しょうしゃ</sup>な石碑にふさわしい、修好あふれる人間模様を内包していて、ここでも思わず感銘を覚える。

まずは碑文では、昔日の長安城と平城京、当今の西安市と奈良市との、古今にわたる不思議な因縁のめぐり合わせを回顧している。続いてあたかも当年こそは、日中平和友好條約締結5周年に相当する秋に逢着したので、まさにこの記念碑を建立するにいたった諸相を、西安市革命委員会の宮葆誠氏の書で、情念を込めた達筆の本文511字に収めたものである。

次に、向って左（東面）には、日本の石碑では、本文に先立って大和言葉で、仲麻呂の望郷の名歌（天の原…）を掲げているのに対応して、中国のばあいには、以下のように五言絶句の近代詩風に翻訳して、彫刻されている。

翹首望東天 神馳奈良辺

三笠山頂上 想又皎月圓

さらに向って右（西面）には、すでに紹介した李白が、彼の（幸いもまぼろしになった）死を悼んで作った「晁卿衡を哭す」と題する七言絶句を、東西両面それぞれに、日中相對して、堂々と刻字している。

日本晁卿辞帝都 征帆一片遶蓬壺

明月不歸沈碧海 白雲愁色滿蒼水

これらの詩歌が誕生した経緯や内容については、既述のとおりであるが、ここできわだって痛感されることは、四面それぞれに、前年に日本で建立された記念碑に対応しながら、衆知の杣を凝らした発想から、全貌が成っているとみてとれる一事である。同時に、設定された環境、風致という点では、わが国としては歴史を誇る奈良市ではあるが、殺風景な田園の中に造成されたばかりの、平素は訪う人もまれな新開地であることを思うと、多少の違和感を覚えざるを得ない。

よってわれわれとしては、古来から崇敬の聖域となっている唐招提寺と相携えて、碑銘の精神そのままに、仲麻呂顕彰の美德が、将来とも展開される日を望んでやまない。

### 3. 鑑真と、その高足栄叡

いままさに回顧したように、754年2月4日、すでに来朝していた道璿<sup>どうぜん</sup>の弟子たちや、30余人の衆僧、その他、役人や信者らに迎えられ、東大寺別当・良弁<sup>りうべん</sup>の案内で、金銅盧舎那仏を礼拝することができた。まことに鑑真にとって



鑑 真  
(唐招提寺)



は、12年間にも及ぶ船旅の難行苦行が、いまここに報われたのであった。おそらくは夢のまた夢の境地だったに違いない。

その夢の中の夢が実現して、唐招提寺を創建することができたのは、その5年後のことで、鑑真は、東大寺戒壇院かいだんいんの管理は、高弟の法進に譲って、義静ぎじょうを始めとする弟子たちを連れて、移り住むことになった。

その経営の主体も、かねて戒壇院護持のため喜捨されていた備前国の田園一百町歩を当てることができた。こうして万事につけ悲願成就を適えて、大団円の心境にあったのも東の間、おわしますこと4年後の5月6日、自坊の宿坊で、結跏趺座けっかふざして西向きのまま、悲喜劇万丈の生涯を、76歳をもって閉じてしまった。いうまでもなく古刹・唐招提寺東北部の小墳墓に、大和上の遺骨が答拝たつぱいされ、延延としてこんにちまで、内外の参拝者によって香華の絶ゆることなきほどで、かつまた観光地としての面目が保たれているのも、故なしとは言い得ないであろう。

それにつけても1963年は、まさしく鑑真示寂じやくして千二百年に当たる。いみじくもその年、5月6日の祥月命日しょうつきめいにちを選んで、ゆかりの深い東大寺大仏殿において、別当大僧正そうじょう・狭皮明俊師さかわみょうしゅんの導師により、鑑真和上えんじやく円寂千二百年忌が営まれた。

日本の仏教徒、文化人らを中心とした遺徳奉賛会が主催し、一方では、かねて訪中のうえ要請した大谷栄潤師えいじゆん（元参議院議員・真宗東本願寺派連枝）の意向を受けて来日した、中国仏教協会副会長の趙樸初氏ちやうはくしよほか3名も、鑑真の母国を代表して参拝した。げに日中両国友好協賛のうえ、いとも厳粛な法要が成就できたその意義は、きわめて大なるものありといわれよう。

参詣者一同は、焼香、法要が終わると、そのむかし鑑真が、生涯心血を注いだ戒壇院を拝観し、唐招提寺に拝礼して、鑑真の墓参を果たすことができた。

翌5月7日は、京都東本願寺における歓迎会に臨み、さらにその翌日、華頂会館で開かれた「奉参の夕」には、満堂の参集を得て、国交條約締結前にもかかわらず、情感を込めた丁重

なあいさつが交わされた。

趙樸初氏は答礼の言葉で、「千二百年前における歴史の流れのなかで、人為的な障害はあったものの、両国における文化的血統と伝統は根深く、ゆるぎないものであるから、8世紀において発揮した鑑真の精神を体して、あらゆる国難と魔障を排除して、両国人民がともに団結し、友好を深めるよう努めたい」と、切切たる胸中を吐露されているが、日中交流史上に残る快挙であるといえ、大げさであろうか。

ひるがえって眼を中国へ転じて、いまひとつの友好物語を報告したい。

まずもって鑑真の生れ故郷・江蘇省揚州の法浄寺（前掲した大明寺）に、唐招提寺金堂こんどうを縮小した堂宇が建立され、同寺に鎮座まします鑑真の座像を模して、著名な彫刻家・本郷新氏によって、2分の一の名作が、奈良に対応して中国でも答拝たつぱいされたいきさつについて、触れなければならない。

この記念堂創建の法要は、同年、しかも和上じやうが日本へ向けて船出した（既述）10月15日を選んでとり行われた。ついては、90歳を迎えた清水寺貫主・大西良慶師を含む、鑑真和上慶賛訪中日本仏教代表団の9名のほか、小説『天平の薨』の作者・故井上靖<sup>48)</sup>らの参加があって、鑑真堂において、日中の僧侶、約二百名による、日中合同の入魂法要が厳粛に営まれた。

いみじくも千二百有余年前のこと、日中両国にわたり、身を挺して貢献した人物の偉業に対する感謝報恩の営みを、現代に実現した美挙は、実に美しく、さわやかな極みであった。しかも日中を代表する著名な民間人の手によってなし遂げ得たという事実には、敬服するばかりである。

関連してまた前掲の、鑑真の高弟で、師とともに日本へ帰る途次、思い半ばにして750年、異境の端州（肇慶市）にて帰らぬ人となった栄叡ようえいの記念碑が、これまた肇慶市郊外の鼎湖山上にある慶雲寺境内に建立されたのであった。

碑の裏面には、趙樸初氏の撰になる「日本入唐留学僧栄叡大師記念碑」の碑記が彫刻されている。ここでも日中合同による碑前勤行ひぜんこんぎやうが、

いとも嚴重に挙行されたのであった。

これを要するに本章では、仲麻呂を取り巻く鑑真および榮叡らの、日中にまたがる軌跡を追って、数奇極まる出会いと、永久の別れを追慕してきた。ついでには千二百有余年を経たこんにち、両国合同、協賛によるさまざまな、心温まる顕彰の催しが営まれたことをも振り返りながら、報尽の念を新たにした。

つらつら鑑みるに、玄宗逝いて、ここに数えて1,231年、仲麻呂1,223年、鑑真1,230年、榮叡は1,243年を閲してしまっている。前述したように、こうした秋、日本の天皇が訪中して西安にも巡幸されると聞き及ぶ。恭しくもそのかみを憶念されるにつけ、われわれ一国民としても、その意義の深遠なる主旨には、思わず襟を正さざるを得ない。

## むすび

仲麻呂と清河が相携え、相励まし合いながら、安南から、すっかり荒れ果てた長安へ、かつがつたどりついたのは、755年6月のこと。11月には安祿山は范陽で反乱を起こして大燕皇帝を名乗り、洛陽を占拠してしまった。

翌年には玄宗は帝位を退き、一族を連れて四川省の蜀へ落ち延び、仲麻呂も従った。よって、さしもの長安も突厥の蛮族たちに踏みにじられていった。長安を出発した翌6月14日には、唐の護衛軍がまず楊国忠や夫人たちを殺し、ついで帝にせまって、長安の南の馬嵬で、楊貴妃を殺害してしまったが、直面した玄宗にしてみれば、胸中やいかばかりか。そのあと安祿山は、長安を占拠している。

この年7月、甘肅省靈武で、肅宗が即位した。避難先の、いまの陝西省鄜州の鄜村で、このむねを聞いた杜甫は、これに走ろうとして、安祿山軍に捕えられて、長安に監禁された。

李白は、12月に永王璘の幕僚となり、安祿山と戦ったが、翌年2月、敗れて江西省の潯陽の獄につながれてしまった。同年4月に、杜甫は長安を脱出して新帝肅宗の行在所へ馳せつけ、

その冒険的な行為が認められて、左拾遺を授けられている。

しかしながら安祿山は実子の安慶緒に殺害され、翌757年10月には肅宗が、12月には玄宗が、それぞれ長安へ帰った。仲麻呂も同行したに違いない。この安慶緒も、その3年後、史思明に殺され、彼もまたその2年後には、実子の史朝義に殺害されてしまった。そのまた2年後の763年に、彼は部下に殺され、かくして安史の乱は終末を遂げた。

乱は平定されたが、もとより唐の黄金時代は、はるかに過ぎ去っていた。でも仲麻呂は肅宗から、左散騎常侍、鎮南都護<sup>49)</sup>を経て、光祿大夫兼御史中丞となり、代宗のときには北海軍開国公を授けられるなど、いはば宰相、節度使等の高位、高臣に達することができた。

とはいうものの晩年になってみれば、位階も官職も人臣を極めながらも、仲麻呂にとっては、余りにも空しいものであったに違いない。

759年には、儲光羲や王維も相次いで帰らぬ人となってしまった。しかも3年後の4月には、一介の異国の書生を、世界最大の都市・長安の檜舞台まで登場させてくれた玄宗までが、続いて、肅宗も同月に薨じてしまった。玄宗の側近であった高力士も相次いでいるし、11月には李白も旅に逝ってしまった。

ときに同期の桜・真備は健在で、右大臣正二位まで栄進して、奈良朝の発展に貢献しているが、いまや異国の人に過ぎない。仲麻呂にとってみれば、玄宗もこの世の人ではない。ただ代宗の好遇と、清河の友情あるのみ。こうした環境のもと、安南への赴任は、彼が漂着して生き残ったところ、その思いやいかに。

詮ずるところ、いまや本稿を貫いて縷々、顕彰に努めてきた仲麻呂も、官界の生活を退任して3年後、本稿前篇の最後を結んだように、770年正月、ただならぬ人生の波濤を踏破しながら、いかんせん黄泉の旅路へと出立してしまった。

杜甫はまた、前記のように左拾遺に使官したのも束の間、同僚との確執があったりして、1年あまりで職を去り、48歳のとき旅に出てし

まった。以後11年間さすらい続けるうち、今日残る四川省成都の郊外にある浣花溪で、幽栖な閑居（現在、杜甫草堂として、その跡地に記念館が建てられ、観光地にもなっている）を営み、家族と共に約5年、かなり幸福な生活を送っていた。



杜甫(号は少陵)草堂  
(松見：1990年)

備真備は、その後、孝謙、淳仁、称徳天皇に仕えていたが、まさしく仲麻呂逝去のあと、旬日を出でずして称徳天皇が崩御されるや官を辞去した。しかし5年後の宝亀6年10月20日、これまた帰らぬ人となってしまった。〔『続日本紀』巻33 光仁天皇〕。

つらつら思うに、まことに因縁浅からざる仲麻呂とは5年早く生れ、5年長く生きたことになる。

『平家物語』冒頭の叫び、「祇園精舎の鐘のこえ、諸行無常のひびきあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす。おごれる者はひさしからず、ただ春の夜の夢のごとし。……とほく異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これらはみな旧主先王のまつりごとにもしたがわず……」をかみしめながら、われわれはここに、掉尾を締めくりたい。

#### 追記、ならびに謝辞； 松見

本稿を執筆するにいたったそもそもの切っ掛けは、文中でも触れたように、12年前のこと、中国の著名な図書館学者である張白影氏が、権威ある学会誌『中国

図書館学報』誌上で、「日本の学者・阿倍仲麻呂は、千二百有余年前、帝室図書館長としても、天下の玄宗に大臣格で優遇され、中日友好の懸け橋として貢献し、在唐53年の骨を、異国で埋めた一朵の桜花である」、という趣旨のレポートを発表した局面にさかのぼる。

すなわち、この呼び掛けを拝読した筆者が思うに、この一文は、もとより中国の図書館界に向けて啓蒙されたものとはいえ、果して日本において、どれだけの人士が管見するであろうかという、恥じらうべき杞憂にかられたのであった。

そこでまずは同志・児玉孝乃女史らに相談したところ、大げさに言えば、何としても仲麻呂をめぐるさらに検索し、感銘した経緯を顕彰しなければならない、という責務に駆られたのであった。

こうした弾みで、かねてからの因縁で、本学図書館とも入魂の親交を賜わっている、武漢外国語学校の助理講師である楊志清先生に、そのむねを伝えた。

しかるところ、先生は、母校の武漢大学を始め、由緒ある湖北省図書館などにも出向いて、中国所在の貴重な資料を（現今なればコピー）書写して、翌1980年11月23日付けて送り届けるとともに、是非と貴国でも称揚願いたい、それがためには、でき得る限り協力するというしだいであった。

ところで世に10年ひと昔ということもあるが、実は去る6月、楊先生は、筆者が身元保証人になって、願望が適い、早稲田大学日本語研究教育センターの特別研究生として留学し、今夏も拙宅へ宿泊するとともに、本学へ来学され、じかに話し合う席が得られた。

ひるがえって幸いにも筆者は、本学理事長の好意によって、10年前、17日間にわたって、中国における大学図書館を主体に、いくつかの博物館を巡って交歓する機会に恵まれたが、1昨年、再び目的とする中国へ派遣された。

つまり、そのむかし玄宗を始めとして、仲麻呂や藤原清河、ないしは李白や杜甫らの大詩人、さらには安禄山らが、四川方面へ落ちのびた足どりを下敷きにした旅であった。

近くは、かつてのいまわしき日中戦争当時は、国民政府の臨時首都にもなり、中国政府はもとより、大学も学者も、芸術家たちまでが、四川省の省都・成都や重慶へ追いやられた名残のかずかずをも、わが身で体認し、じっくり見聞きし得た。

しかしながら紙幅のこともあって、ここでは詳細には報告し難いが、現地で、大学関係者や、著名な画家、書家たちとも握手で交歓することができ、今後の友好、交遊のよすがを与えられたいきさつを顧みて、ここに

理事長はじめ、訪中のたびに面倒をかけた武漢大学図書情報学院の、黄宗忠副院長、および楊志清ら、各先生にも、児玉女史ともども、あれこれおしなべて心から謝意を表したい。

ところでこの史論では、かねがねのこと仲麻呂は、長安の興慶宮という晴れの大舞台で、玄宗や楊貴妃、李白や杜甫らの一座が登場して、歴史に残る筋書きな数奇の大芝居が演ぜられた模様を、開陳してきた。

一転して次の幕では、千二百年も過ぎた現代、前掲のように日・中相呼応して、仲麻呂の記念碑が建立されたが、一方では、両国の演劇界で、これまた対応するように、それぞれの国を代表する名優が主役になって、それこそ、ここではシナリオに基づく名ドラマが演ぜられて好評を博した場面についても披露したいが、これまたそのさわりの部分のみに触れて、類推願うこととする。

つまるところ日本の劇団『前進座』の創設者であり、演劇革新運動の推進者であり、「勸進帳」や「屈原」などの有名劇に主演した、河原崎長十郎を中心に、仲麻呂の劇「望郷詩」が上演されたことは、記憶に新しい。

するとすぐそのあと中国でも、清代に、首都北京で発達した伝統劇・京劇が、武漢市京劇団によって「阿倍仲麻呂」を主役に、舞台芸術として始めて公演されたむねを、上掲の楊先生から承った。そこでその脚本を始め登場人物や、その反響ぶりについても取材できるばかりになっていたが、先生の来日（<sup>とんざ</sup>）が早まってしまったため、しばらく頓挫（<sup>とんざ</sup>）せざるを得なくなったことのみを附記して、前・後篇にわたって、中国図書館史の一ページを埋めようとした、史話の幕を閉じることとする。

(1992, 10, 19)

#### 注・文献

- 1) 『唐書』 卷223上 李林甫伝
- 2) 『唐書』 卷206 楊国忠伝
- 3) 『唐書』 卷225上 安祿山伝
- 4) 校讎の諸問題については、次を〔参照〕
  - a. 松見弘道著『図書館と漢籍——図書・図書館のルーツを探る——』 明星大学出版部 (1989) P. 270-71
  - b. 本稿：前篇の注3)
- 5) 平康坊：ちなみに唐の李德裕の著『開元天宝遺事風流藪沢』に、「長安有平康坊、妓女所居之地。京都俠少、萃集于此、兼每年新進士、以紅牋名紙、遊謁其中。時人謂此坊、為風流藪

沢。」という、ほほえましい記事がある。

ここに見られる坊とは、区域ないしは一区画をいう。長安の代表的な花柳街（横町）のことで、遊郭の草わけといえよう。毎年、進士に合格した美青年たちが、<sup>あか</sup>紅い名刺を以て、売っこ妓女のご機嫌うかがいに集まったところ。

- 6) 書厄については、次を〔参照〕
  - a. 注4) 『図書館と漢籍』 P. 265-67
  - b. 本稿：前篇の注1)
- 7) 例えば、『扶桑略記』 卷6 元正天皇の條
- 8) 遣唐使は出発前には、奈良市東部に在る春日山の一峰である三笠山（今の若草山）で、海路の平安無事と、一行の安全な帰国を神に祈願する風習があった。（ちなみに、仲麻呂の望郷の名歌の根源にもなっている）。

この渡唐をめぐる歌が、万葉集には数多く見られる。

そのうちの一つに、「四つの船 船の舳並べ……相飲まむ酒ぞこの豊神酒」（卷19 4264）とあり、その反歌の冒頭にも、「四つの船 早帰り来と……」（4265）と歌われている。

つまり、四隻の船が舳先を並べて（平安に渡唐し、つつがなく帰って復命を奏上するであろう、そのときこそは）また共に飲もうと思う、この芳醇（<sup>ほうじゅん</sup>）なお神酒を、と。

その反歌に、「四隻の船よ、早く帰って来るのだよ……」と、祈りを込めて応答しているありさまが読みとれる。

つまるところ、あこがれの渡唐には、準備と覚悟を込めて、四隻の船団が組まれて往復していた模様が、このころの通例となっていたことがうかがわれる。

- 9) 『扶桑略記』 卷6 元正天皇の條に「靈龜二年八月、大伴山守為遣唐大使、多治比縣守。安倍仲麿為副使。……乗紅四艘、五百五十七人渡海。十月一日丁卯、遣唐使多治比縣守等、到唐廷。僧玄昉・大和長岡・阿倍仲麻呂・吉備真備・羽栗吉麻呂等、隨行。」
- 10) ここにいう国子学とは、都城内に設けられた貴族の子弟や、全国の英才などのための学校。後世、国子監と称し、その長官が国子祭酒であった。太学は、天子・王者が建てた学校で、修己知人の道を教える最高の学府。大学ともいう。四門学とは、一般の人を入学させるために、太学の四方の門のそばに建てた学校。その長官を四門博士といった。

それぞれ格差がうかがわれるが、ちなみに宋の王<sup>おうとう</sup>謙の著『唐語林』によれば、これらの学生3千人といわれ、留学生では、日本人が最多であった。

- 11) 趙玄默の伝は、前篇にて紹介した『唐書』に見られる馬懷素の伝中に出ず。開元5年(717)に秘府の蔵書整理が行われたとき、秘書監であった馬懷素の命によって、上述した国子監として、校正事業に参加したこともある学者。

- 12) 9種の経書をいう。その呼称は唐代に始まっているが、9種の内訳には異説が多い。

ついでに本稿前篇のP. 109に挙げた徐堅の著『初学記』では、易・書・詩・三礼(周礼・儀礼・礼記)・春秋左氏伝・公羊伝・穀梁伝をいう。これらのいきさつについては、次の訳書を〔参照〕

a. 劉国鈞 鄭如斯著 松見弘道訳『中国書物語』 創林社 (1983) P. 32-36

b. 劉国鈞著 松見弘道訳『図書の歴史と中国』 増訂第2版 理想社 (1980) P 71、106-108

- 13) 慈恩寺は、西安の南、約4km、曲江池の北に在り、唐の高宗が太子であったとき、648年に、母の文德皇后の慈恩に報いるために造営された寺。ひところ衆僧が三百人も居たと伝えられる。

4年後、西院に、現在大雁塔と呼ばれる塔が建てられ、7世紀に、三蔵法師玄奘が、インドから将来した仏像、經典なども収めた。

長安年間(701-04)に、高さ64mに達する7層塔に改築された。唐の詩人たちが、ここに登って作詩したことや、進士の試験の合格者もまた、この塔に登って名を記するを栄誉としていたことが伝えられる。

このたび天皇が、この寺塔を訪問されたいわれは、まさしく千三百余年からの、こうした由緒によるものといえよう。

- 14) 天子の左右にあって、宮中の重要文書を司る宰相の職。

- 15) 本稿：前篇の注5)〔参照〕 ここでは、現代から見た秘書省の組織図を掲げておいた。

- 16) 張白影：『中国図書館事業史上の一朵桜花——記日本学者朝衡任唐代秘書監』 中国図書館学会 中国図書館学報 1980 P. 82-83

- 17) 衛尉とは、主として宮城の警備、護衛に当たる官職で、卿はその長官。仲麻呂は前掲のように、当初はその少卿(次官)を勤めたことがある。

- 18) 正二位の唐名で、諸侯・王公・將軍のうち、功績

の著しい者に与えられた官名で、漢代に始まり、清代に廃止された。

- 19) 2千石の、宮中の顧問官役の位階。青いひも付きの印を賜ったので、このように名付けられていた。

- 20) 唐の玄宗時代に置かれた官名で、特に一芸に秀でた者が、天子のそばに仕えて、ご用を勤めた。学者や文人のなかから選ばれるばあいが多く、李白もそのひとり。

- 21) 『続日本紀』 卷33 光仁天皇の條に「吉備真備……靈龜二年、年廿二、從使入唐、留学受業。研覽經史、該涉衆芸。我朝學生播名唐國者、唯大臣及朝衡二人而已。」と。2人は、中国に名を残す代表者であるといえる。

- 22) 『続日本紀』 卷16 聖武天皇の條に「天平十八年六月己亥、僧玄昉死。玄昉、俗姓阿刀氏。宝龜二年入唐學問。……天平七年隨大使多治比真人広成還歸。齋經論五千余卷及諸仏像來。皇朝亦紫袈裟著之。」

- 23) 上掲注22)〔参照〕

- 24) 平安の王朝人ころより、日本人の心の感動や愛情が集約された、なじみの深い百人一首にも選ばれている、妙なるしらべが漂う名歌であることはいうまでもない。

この歌はまず、勅撰集である『古今和歌集』 卷第9 羈旅(故郷を離れて、よその土地に身を寄せる)の歌として収録しているし、『今昔物語』 卷24には、「安倍仲麿於唐説和歌語第四十四」との見出しで詠まれている。

さらに『古今和歌六帖』1. 7巻本、『宝物集』2. などにも掲載され、『土佐日記』正月二十日の條では、長い解説が付けられているが、ここでは、初句を青海原と口ずさんでいる。

つまるところ、この歌をめぐる物がたりは、『古本説話集』上の45や、『小世継』45にも見られるが、とても話題の多い歌ではある。

- 25) 中国唐代に置かれた判官は、節度使、觀察使、防禦使の属官であったが、元代以後は廃止した。

わが国の「大宝令」では、長官、次官、判官、主典の四等官を置いた。その第3位の判官は、庁内の取り締りに任じた。

- 26) 井上靖著『天平の藁』の第5章には、このあたりを詳しく、興味深く描いている。

- 27) 『唐書』 卷202 李白伝

- 28) 『唐書』 卷201 杜甫伝

- 29) 『唐書』 卷207 楊思勗 伝中

- 30) 『唐書』 卷143 高適伝
- 31) 『唐才子伝』 卷3、『三庫未収書目提要』 卷2  
岑参伝
- 32) 広陵とは、現在の江蘇省楊州市にある。『尚友録』  
卷17によれば、山西省陽城県にある王屋山に往し  
て、王屋山人と号した。上元の初め進士に及第す  
るも、官に仕えず、詩文の道を歩み、『李翰林集』  
を編している。
- 諸国の名山を訪ねて放浪中、広陵で李白と相ま  
みえたが、そのおり魏万は、仲麻呂の遭難を知ら  
せたのであった。
- ついで李白は彼に、『送王屋山人魏万還王  
屋』という表題の、五言・120句に及ぶ、別離  
の詩を贈った。その詩中(97、98句め)に、「身  
著日本<sup>こく</sup>裘<sup>きぬ</sup>、昂藏<sup>こうざう</sup>出風塵<sup>ふうじん</sup>。(気宇軒昂)」の  
句が出ている。
- 33) 『全唐文』 卷437、『全唐詩』 卷10、『尚友録』  
卷14 李陽<sup>りやうひやう</sup> 冰 伝
- 34) 『唐書』 卷202 王維伝
- 35) 杉本直治郎著『阿倍仲麻呂伝研究』育芳社(1940)。  
なお今枝二郎著『唐代文化の考察(1)』には、  
貴重な研究資料のほか、仲麻呂関係年表が掲載さ  
れている。
- 36) 『尚友録』 卷2、『四庫提要』 卷149 儲光義伝
- 37) 『旧唐書』 卷130 顧況伝
- 38) 定員以外に設けた郎(官)。唐の太宗は当初、定  
員制を設けて、天下の賢才730人を集めれば、行  
政にはこと足りるとしたが、この時すでに定員外  
の官吏がいたといわれる。〔『唐書』 百官志序〕
- 39) 『晉書』 卷94、『宋書』 卷93、『南史』 卷75  
陶潛伝
- 40) 『宋書』 卷67、『南史』 卷19 謝靈運伝
- 41) 『唐書』 卷203 孟浩然伝
- 42) 『唐書』 卷201 韋応物<sup>あきな</sup> 伝
- 43) 伯鸞<sup>はくらん</sup>は、後漢の梁鴻<sup>りやうこう</sup>の字で、平陵の人。博学  
多識で、結婚すると霸陵<sup>はりやう</sup>の山中に入り、耕織を  
もって業となす。著書十余篇を残している文化人  
であった。〔『後漢書』 卷113 高士伝下〕
- 44) 『唐書』 卷249 劉安伝の中に包佶に及ぶ。
- 45) 『唐書』 卷203 李華<sup>しやうえい</sup> 伝
- 46) 『唐書』 卷202 蕭穎<sup>しやうえい</sup> 伝の中に陸據に及ぶ。
- 47) 唐代に置かれた官名で、天子に近侍して、その過  
失をいさめることを司った。『唐書』 百官志 卷  
2に、「左補闕<sup>さほけつ</sup>六人、従七品上。左拾遺<sup>さしゆい</sup>六人、従  
八品上。掌<sup>く</sup>供奉諷諫<sup>ふうかん</sup>。大事廷議、小則上封事」  
と見られる。このうち、左補闕は門下省に属し、

右のそれは、中書省に属した。

- 48) 井上靖が参加した模様については、次の書の中で、  
氏が、荒垣秀雄と対談したやりとりでも触れてい  
る。『井上靖対談集——歴史の旅』 創林社  
(1980) P107-14

- 49) 『唐書』 卷220 東夷伝・日本 「上元中、擢衡  
為左散騎常侍、鎮南都護。」と。

なお、仲麻呂晩年の官職のことについては、論  
者のあいだで、いきさつがうかがわれるが、詳し  
くは次の書を〔参照〕

本稿注35) 今枝氏の著書 P. 179-80

## Summary

### A Historical Look at the Emperor Xuan Zong's (玄宗) Library Administration; With special mention of Chief Secretary of the Monastic Library, Abeno Nakamaro (阿倍仲麻呂) and his friendships with the Chinese and Japanese Literati (Part 2)

Takano Kodama and Hiromichi Matsumi

In Part One of this paper, we reviewed the contribution of the emperors including Kao-tsu (高祖), the founder of the Shen-tang Dynasty, to the establishment and expansion of the libraries in China based on the leadership of the chief librarian called Mi-shu-chien (秘書監) who was appointed directly by the emperors. Among other things we featured the achievements of Emperor Xuan Zong (玄宗). Although he was absorbed in battles everyday, he was also enthusiastic about the field of library administration, urging and encouraging Mi-shu-chien and other able fellowmen to push forward with the work laying the foundations of the library administration and setting it on its path.

In Part Two we would like to go into the detail of how Abeno Nakamaro (阿倍仲麻呂) who was sent to China as an envoy in 717, was educated in China and became a civil officer there and was finally appointed by Emperor Xuan Zong as the

first Japanese Mi-shu-chien. In addition to this honor, he formed close friendships with such famous poets Changan as Li Bai (李白), Wang Wei (王維), Chu Guang-hsi (儲光羲), Bao Ji (包佶), and Chang Hua (趙驊), who were living in the capital city at that time. He also cultivated warm friendships with Kibino Makibi (吉備真備), a colleague who accompanied him to China from Japan, and with the Japanese Buddhist priest Gen Bo (玄昉) and Fujiwara Kiyokawa (藤原清河). After explaining his dramatic history, we would like to conclude this paper by explaining the background of erected in the cities of Nara, Japan and Shenan, China in honor of his contribution to forming a friendship between the two countries, and relating various significant events which were held in both countries to commemorate the achievements of Chien-chen (鑑真), who made the perilous journey to Japan to help spread the Buddhist religion there.

(司書、司書教諭課程・図書館学)